大江健三郎は「戦後」に君臨しないまま統治した　池澤夏樹さん追悼

有料記事

2023年3月14日　9時00分

池澤夏樹さん（右）が編集した『日本文学全集』について語りあう大江健三郎さん=2014年

　戦後文学を牽引（けんいん）した大江健三郎さんが3日、亡くなった。親交のあった作家、池澤夏樹さんは自ら編集した「日本文学全集」のうちの一巻をまるごと大江作品にあてた。その魅力とは？　追悼文を寄せてもらった。

◇

　おおえ・けんざぶろう

　なんと美しい名前だろう。

　やわらかい母音が三つ連なり、それをKという子音がしっかり受けて、更にごつごつしたZが乱して、「ろう」で丸く収まる。音節の数は軽く七五調を逸脱している。

　こんな名前を持った男が詩人でないはずがない。

　いわゆる詩集はない。しかし**彼の小説のタイトルをみればそれがそのまま詩**であることは歴然としている。

　思い出すままに順不同で並べてみれば（このところぼくは羅列という古代的な文芸の手法を多用している）――

　燃えあがる緑の木

　洪水はわが魂に及び

　芽むしり仔（こ）撃ち

　狩猟で暮したわれらの先祖

　人生の親戚

　われらの狂気を生き延びる道を教えよ

「雨の木（レインツリー）」を聴く女たち
みずから我が涙をぬぐいたまう日
懐かしい年への手紙
……

そして、これらの小説の本文はそのタイトルを冠として戴（いただ）いて当然の**密度ある文体**で書かれている。それが**二百ページでも七百ページでも緩んだところがまったくない。この統御の力はそれだけでため息**を誘う。

思想についてはどうだろう。

敗戦から始まって右下がりの斜面をずりおちてここまで来てしまった日本社会の流れに大江さんはいくつものダムを築いて抗した。時には路上に自ら坐（すわ）り込みまでした。憲法第九条に表される戦後という時代の精神を明快に伝えてきた。ぼくたちにとって「戦後」はほとんど元号であり、**大江健三郎はそこに君臨しないままに統治して**きた。

社会における女たちの力を正しく読み取って、家刀自（いえとじ）や乙女らの活躍・暗躍を描くことで明治期以降の家父長制の日本の歪（ゆが）みを是正しようとした。

小説の奔放は言うまでもない。どうしてこんな展開になるのかとあきれるばかり。

『同時代ゲーム』を例に取れば、メキシコの大学で講ずる男が故郷の妹に宛てて書く手紙という体裁を取っている。彼の前の壁には妹の陰毛の写真が貼ってある。この場合、妹は過去への通路を確保する巫女（みこ）なのだ。そしてその過去。四国の山の中にあった、中央の権力の外にある小さなコミュニティーの波瀾（はらん）に満ちた、というよりむしろ破天荒な歴史。近代という時代の中にむりやり押し込まれた神話的な古代。ここでは近代は逆襲されてたじたじとなっている。

大江さんがメキシコの教壇に立ったのは事実で、そこでたまたまあるバーで隣に坐ったのが作家で写真家のフアン・ルルフォだったというエピソードが伝えられている。

ぼくが自分勝手に『日本文学全集』を作ろうと思い立った時、大江さんはずいぶん応援してくださった。刊行に際して公開の対談の相手をしていただいた。この全集の方針として古典の現代語訳を作家や詩人に頼むということがあった。「これで次の世代の読者に古典が手渡されるといいのですが」とぼくが言うと、大江さんは「それ以前に、その作家や詩人の人たちがこの仕事を通じて変わると思いますよ」と言われた。

これには虚を突かれた。そういう視点があることに気づいていなかったのだ。そして、実際に彼らは大きく変わった。それは今や一つの潮流となった気がする。

先に挙げた大江さんの作品のタイトルのいくつかは**ブレイク**や**オーデン**の詩から取られている。ここ何年かお目にかかることはなかったが、そういう機会があったとしたらぼくはディラン・トマスの「ロンドンの大火で亡くなった少女を悼むことを拒絶する」という詩のことを話したかった。安直に、形ばかりの悼みをするなという内容で、ぼくに言わせれば実に大江的なのだ。

さて、もう大江さんはいない。
目の前には作品の山脈がある。再び一座ずつ登らなければならない。